

賞賛獲得欲求・拒否回避欲求とBig Fiveの関連について

Relationships between the five-factor model of personality and praise seeking or rejection avoidance needs

次世代教育学部教育経営学科

吉澤 英里

YOSHIZAWA, Eri

Department of Management for Education

Faculty of Education for Future Generations

要約：パーソナリティとしてのBig Fiveが賞賛獲得欲求および拒否回避欲求へ与える影響を検討した。結果から、拒否回避欲求には情緒不安定性と調和性からの正の関連があった。さらに、賞賛獲得欲求には外向性、開放性および誠実性からの正の関連と調和性からの負の関連が有意であった。これらの結果により、臆病で他者に対して消極的なパーソナリティ特性が拒否回避欲求を高める一方、他者に対して積極的で有能なパーソナリティ特性が賞賛獲得欲求を高めることが示唆された。

Abstract : The influence of the five-factor model of personality on praise seeking and rejection avoidance needs was examined. The results indicated a significant positive regression from neuroticism and agreeableness to rejection avoidance needs, a significant positive regression from extraversion, openness and conscientiousness to praise seeking needs, and a significant negative regression from agreeableness to praise seeking needs. These results suggest that personality traits including shyness and passivity might enhance rejection avoidance needs, whereas activity directed at others and ability might enhance praise seeking needs.

キーワード：ビッグファイブ, 賞賛獲得欲求, 拒否回避欲求, 自己呈示

Keywords : five-factor model, praise seeking need, rejection avoidance need, self presentation

I. 問題と目的

本研究の目的は、パーソナリティから賞賛獲得欲求あるいは拒否回避欲求が高い人の特徴を考察することである。パーソナリティとしてBig Fiveを扱い、5つの特性が賞賛獲得欲求あるいは拒否回避欲求に与える影響を調べる。

菅原 (1986) は、自分の外的・対人的側面に注意を向けやすい傾向である「公的自己意識」の強い人には2つの矛盾する対人態度（顕示的なものと消極的で内気なもの）が存在すると論じた。そして、それらの対人態度を方向づけるものとして、賞賛獲得欲求（他者から賞賛されたい、好かれない）と拒否回避欲求（他者から嘲笑されたい、拒否されたくない）があると考え、2つの対人的欲求を概念化した。以降、賞賛獲得欲求・拒否回避欲求は様々な心理的事象に影響を与えることが報告されており、中でも自己呈示との関連を論じた先行研究は多い。

自己呈示とは「他者から見られる自分の印象に影響を与えようとする (安藤, 1994)」ことである。自己呈示が私たちの日常生活でどのような機能を果たしているのかについて、安藤 (1994) は、報酬の獲得と損失の回避、自尊心の維持・高揚、アイデンティティの確立の3つを挙げた。自己呈示と関連づけて論じられる心理的事象のうち、2つの対人的欲求からの影響が指摘されているものとして、「対人不安」(佐々木・菅原・丹野, 2001), 「対人不安傾向」(菅原, 1998), 「対人恐怖心性」(三田村・横田, 2006; 市川・外山, 2016) といった対人場面での不安や、見られる自己としての「瘦身願望」やそのような自己をコントロールしようとする「装い」(馬場・菅原, 2000; 浦上・小島・沢宮・坂野, 2009; 鈴木, 2006; 鈴木, 2012; 浦上・小島・沢宮, 2013), さらに、振る舞いとしての「演技パターン」(定廣・望月, 2011) がある。以下、それぞれが2つの対人的欲求からどのような影響を受けているのかを、先行研究をもとに概観する。

人前や対人場面で生じる不安や恐怖のことを「対人不安 (social anxiety)」といい、そのような傾向を示す「対人不安傾向」や「対人恐怖心性」は青年期の特徴の1つとして説明される(永井, 1994)。Schlenker & Leary (1982) の自己呈示モデルは、対人不安の生起過程を説明したものである。他者に対して特定の印象を与えたいと動機づけられているが、それが成功するか疑わしい時に対人不安が生じると説明され (Schlenker & Leary, 1982), その動機づけとして2つの対人的欲求が位置づけられている。先行研究では、拒否回避欲求が対人不安^(注1)を高めることが報告されている(佐々木ほか, 2001; 三田村・横田, 2006; 市川・外山, 2016)。賞賛獲得欲求については対人不安を低める(佐々木ほか, 2001; 三田村・横田, 2006)との報告がある一方で、影響しない(菅原, 1998; 市川・外山, 2016)と結論づけた研究もある。

瘦身願望は、他者から見られる自己の外見をよくしたいという願望の1つの表れである。男女学生に対する先行研究から、賞賛獲得欲求が高いことで自己の身体に対するメリット感が高まり、それによって瘦身願望が高まると報告されている(馬場・菅原, 2000; 浦上ほか, 2009; 浦上ほか, 2013)。一方、拒否回避欲求について、自分の身体に対する他者視点でのデメリット感が高まったり(浦上ほか, 2009)、体型に対するネガティブな印象予期が高まることで瘦身願望が強まったりする(鈴木, 2012)との報告がある。女子学生を対象に調査をした鈴木(2006)では、賞賛獲得欲求が高いほど化粧品や衣服の購入点数が多く、ダイエットの実施期間が長い一方で、拒否回避欲求にはそのような傾向が認められなかった。

定廣・望月(2011)では、日常的場面での演技パターン(目立つ演技としての「好印象演技」、目立たない演技としての「調和的演技」と2つの対人的欲求との関連を検討している。その結果、賞賛獲得欲求が高いほど好印象演技をより頻繁に行い、拒否回避欲求が高いほど調和的演技をより行うことが示唆された。

以上のように、2つの対人的欲求は自己呈示に関わる様々な認知・行動・情動に影響を与えている。では、2つの対人的欲求はどのようなパーソナリティの特性に方向づけられるのであろうか。

パーソナリティの理論のうち、いくつかの要素(因子)の程度を量的に測定し、それらを組み合わせてパーソナリティを記述、説明しようとする立場を特性

論という。パーソナリティの因子数については、長年にわたって議論がなされてきたが、近年では、5つの因子によってパーソナリティをほぼ記述できるという5因子論に収束してきており、Big Fiveと呼ばれている(丹野, 2003)。5因子の内容については諸説あるものの、日本で最も使用されている尺度(和田, 1996)は情緒不安定性、外向性、開放性、調和性、誠実性の5つで構成されている。

2つの対人的欲求とBig Fiveとの関係を調べた研究は見られないが、自己呈示とBig Fiveの関係については、若干の先行研究がある。田中(2011)では、他者に対して自分をより良く自己呈示しようとする機能を有する「容姿の問題に対する安全確保行動」が高いほど外向性が高い傾向を示した。また小林(2006)では、成功あるいは失敗時の自己呈示行動(他者への伝え方)とBig Fiveとの関連を調査した結果、外向性が高いほど、成功時には取り入り(e.g. 自分は人間的に親しみやすい)を、失敗時には自己宣伝(e.g. 自分は前向きだ)を多く行っていた。そして、開放性が高いほど、成功時の自己宣伝(e.g. 自分には能力がある)を多く行い、情緒不安定性が低いほど、成功時にも失敗時にも自己宣伝を多く行うことが示唆された。

さらに、対人不安の生起にはBig Fiveが関わっているとの報告もある。Big Fiveの各特性を比較したとき、対人不安が高い者はそうでない者よりも外向性が低くて情緒不安定性が高い一方、残りの3特性にはそのような傾向が認められなかった(Bienvenu, Samuels, Costa, Reti, Eaton, & Nestadt, 2004)。この理由としてLevinson, Kaplan, & Rodebaugh(2014)では、外向性が褒賞(reward)によって動機づけられる傾向としてみなされ、情緒不安定性が否定的な結果への高い感性を持つ傾向としてみなされるため、外向性が高い者は対人状況に積極的な一方で、情緒不安定性が高い者は対人状況を避けると説明されている。この褒賞を求め(褒められたい)、否定的な結果を回避する(嫌われたくない)という傾向は2つの対人的欲求にそれぞれ繋がると推測される。

以上より、特に外向性は賞賛獲得欲求と強い正の関連があり、情緒不安定性は拒否回避欲求と強い正の関連があるとの仮説を検証する。ただし、2つの対人的欲求は社交不安に影響を与える要因の1つであり、Big Fiveとの関連が外向性と情緒不安定性のみに限定されるとは考えにくい。そこで、本研究ではBig Fiveの5因子を全て扱い、賞賛獲得欲求および拒否回避欲求が高い人のパーソナリティの特徴について説明を試

Table 1 因子ごとの平均値, 標準偏差, α 係数, 因子間の相関係数 (Pearson) および重回帰分析結果

説明変数	M	SD	α	目的変数			
				拒否回避欲求		賞賛獲得欲求	
				β	r	β	r
情緒不安定性:N	3.61	0.99	.83	.44 ^{***}	(.39 ^{***})	.04	(-.17 [*])
外向性:E	3.14	1.10	.86	.09	(-.09)	.41 ^{***}	(.48 ^{***})
開放性:O	3.01	0.84	.76	-.12	(-.14)	.29 ^{***}	(.45 ^{***})
調和性:A	3.28	0.85	.76	.20 ^{**}	(.08)	-.12 [*]	(.07)
誠実性:C	2.85	0.85	.79	-.02	(-.03)	.20 ^{**}	(.17 [*])
R^2				.20 ^{***}		.35 ^{***}	
(拒否回避欲求)	3.43	0.76	.85				
(賞賛獲得欲求)	2.89	0.78	.87				

注 β は標準化された偏回帰係数であり, r は相関係数(Pearson)である。

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

みる。

II. 方法

2-1. 調査方法と調査協力者

調査会社マクロミル社のモニター登録者である学生を対象にWeb調査を実施した。調査画面の冒頭に、調査目的とデータの取り扱いに関する説明文を表示し、調査協力に同意する者のみ回答するよう依頼した。最終的に206名(平均20.66歳, ± 1.27 SD, 男性51名, 女性155名)から調査協力を得た。

2-2. 質問項目

賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度: 賞賛獲得欲求と拒否回避欲求を測定する尺度であり, 2因子18項目から構成されている(小島・太田・菅原, 2003)。

Big Five尺度(短縮版): 和田(1996)を基に作成された短縮版であり, 5因子(情緒不安定性:N, 外向性:E, 開放性:O, 調和性:A, 誠実性:C)29項目で構成されている(並川・谷・脇田・熊谷・中根・野口, 2012)。

本研究の質問項目については, 全て5件法(1. 全くあてはまらない~5. 非常にあてはまる)での回答を求めた。

III. 結果

Big Five尺度と賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度について, 各因子の項目の平均値を得点とした。本研究で用いた各因子の信頼係数(Cronbach's α)は.76-.87と概ね良好な値であった。因子ごとの平均値, 標準偏差, α 係数, 因子間の相関係数(Pearson)お

よび重回帰分析の結果をTable 1に示した。

賞賛獲得欲求と拒否回避欲求を目的変数, Big Five尺度の各因子を説明変数とした強制投入法による重回帰分析を行った結果, 拒否回避欲求ではNとAの標準化係数が有意な正の値であった(N: $\beta = .44$, $p < .001$, A: $\beta = .20$, $p < .01$)。賞賛獲得欲求ではNを除く4因子で標準化係数が有意であったが, Aが負の値($\beta = -.12$, $p < .05$), E, O, Cが正の値を示した(E: $\beta = .41$, $p < .001$, O: $\beta = .29$, $p < .001$, C: $\beta = .20$, $p < .01$)。

IV. 考察

結果から, 外向性は賞賛獲得欲求と, 情緒不安定性は拒否回避欲求との間にそれぞれ有意な正の関連を示し, 本研究の仮説は支持された。以下, Big Fiveとの関係に基づいて2つの対人的欲求が高い人の特徴を考察する。

拒否回避欲求は情緒不安定性と調和性との正の関連が有意であった。質問項目より, 情緒不安定性には不安になりやすく緊張しやすい傾向が, 調和性には寛大で怒りっぽくないといった, 他者との付き合いで波風を立てないように振る舞う傾向が, それぞれ読み取れる。つまり, 拒否回避欲求の高さは, 心配性で弱気になりやすく, 温和で親切というパーソナリティ特性に方向づけられると推測できる。

一方, 賞賛獲得欲求は外向性, 開放性, 誠実性からの正の関連が, 調和性からの負の関連がそれぞれ有意であった。外向性の質問項目から, 他者と積極的に関わるという特徴が読み取れる。さらに開放性と誠実性の質問項目を見ると, 前者には「頭の回転が速い(O)」, 「独創的な(O)」, 後者には「計画性がある

(C)、「ルーズな (C 逆転項目)」などがある。いずれも社会的な有能さを表す特性だと解釈できる。人よりも優れた特性を持っていると考えるからこそ、「褒められたい」という欲求が高いのではないだろうか。一方、調和性とは負の関連があった。質問項目に「自己中心的 (逆転項目)」があるように、自己主張の強さの表れだと推測される。

菅原 (1986) では、他者に対してどのような対人態度をとっているかという自己イメージの認知について調査がなされている。そして、「おしゃれ」「人気ある」「ひょうきん」「ゆかいな」「おしゃべり」といった自己顕示的イメージ、「人のよい」「愛想がよい」「八方美人」「引っ込み思案」「気が弱い」といった善良な市民的イメージ、「個性的」「皮肉屋」「ニヒル」「クールな」「さめた」といった周辺人的イメージの3つが抽出された。このうち、賞賛獲得欲求は自己顕示的イメージと、拒否回避欲求は善良な市民イメージと関連していることが示唆された。このような自己イメージにも、上記のパーソナリティ特性が影響していると考えられる。つまり、不安が強くて周りとの調和を好む傾向が、他者から拒絶されたくないという欲求を強め、「人のよい」に代表されるような自己イメージへと繋がる一方、他者と積極的に関わり、社会的に有能で、かつ自己主張の強い傾向が他者から褒められたいという欲求を強め、「おしゃれ」や「人気ある」に代表されるような自己イメージに繋がる。その結果として、拒否回避欲求の高い人ほど調和的演技を頻繁に行い、賞賛獲得欲求が高い人ほど好印象的演技 (定廣・望月, 2011) や装い行動 (鈴木, 2006) を行うと解釈できる。

結論として、拒否回避欲求は臆病で他者に対して消極的なパーソナリティ特性によって、賞賛獲得欲求は社会的に有能で他者に対して積極的なパーソナリティ特性によって方向づけられると考える。本研究の限界として、大学生という青年後期に限定した議論である点が挙げられるため、中高生や成人期と比較することを今後の課題としたい。

【引用文献】

馬場安希・菅原健介 (2000). 女子青年における瘦身願望についての研究 教育心理学研究, 48, 267-274.

Bienvenu, O. J., Samuels, J. F., Costa, P. T., Reti, I. M., Eaton, W. W., & Nestadt, G. (2004). Anxiety and depressive disorders and the five-factor model of

personality: A higher-and lower-order personality trait investigation in a community sample. *Depression and Anxiety*, 20, 92-97.

市川玲子・外山美樹 (2016). 対人恐怖心性-自己愛傾向2次元モデル類型間の失敗経験後に生じる感情の差異 教育心理学研究, 64, 228-240.

小林知博 (2006). 成功・失敗時の自己呈示とリスク重要度, 性格特性, 社会的適応の関係性 青山学院女子短期大学紀要, 60, 69-86.

小島弥生・太田恵子・菅原健介 (2003). 賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度作成の試み 性格心理学研究, 11, 86-98.

Levinson, C. A., Kaplan, S. C., & Rodebaugh, T. L. (2014) Personality: Understanding the Socially Anxious Temperament. In J. W. Weeks (Ed), *The Wiley Blackwell Handbook of Social Anxiety Disorder*(pp.111-132). MA: Wiley Blackwell.

永井 徹 (1994). 対人恐怖の心理-対人関係の悩みの分析- サイエンス社

並川 努・谷 伊織・脇田貴文・熊谷龍一・中根 愛・野口裕之 (2012). Big Five 尺度短縮版の開発と信頼性と妥当性の検討 心理学研究, 83, 91-99.

三田村仰・横田正夫 (2006). アサーティブ行動阻害の要因について パーソナリティ研究, 15, 55-57.

定廣英典・望月 聡 (2011). 演技パターンに影響を与える諸要因の検討 パーソナリティ研究, 20, 84-97.

佐々木淳・菅原健介・丹野義彦 (2001). 対人不安における自己呈示欲求について-賞賛獲得欲求と拒否回避欲求との比較から 性格心理学研究, 9, 142-143.

Schlenker, B. R., & Leary, M. R. (1982). Social anxiety and self-perception: A conceptualization and model. *Psychological Bulletin*, 92, 641-669.

菅原健介 (1986). 賞賛されたい欲求と拒否されたくない欲求-公的自意識の強い人に見られる2つの欲求について 心理学研究, 57, 134-140.

菅原健介 (1998). シャイネスにおける対人不安傾向と対人消極傾向 性格心理学研究, 7, 22-32.

鈴木公啓 (2006). 装いと賞賛獲得欲求・拒否回避欲求との関連 パーソナリティ研究, 14, 230-231.

鈴木公啓 (2012). 瘦身願望および瘦身希求行動の規定要因-印象管理の観点から- 心理学研究, 83, 389-397.

田中勝則 (2011). 身体醜形懸念と性格5因子モデル

の関連 日本心理学会第75回大会発表論文集, 386.
丹野義彦 (2003). 性格の心理－ビッグファイブと臨床からみたパーソナリティー－サイエンス社.
浦上涼子・小島弥生・沢宮容子 (2013). 男女青年における瘦身理想の内在化と瘦身願望との関係についての検討 教育心理学研究, 61, 146-157.
浦上涼子・小島弥生・沢宮容子・坂野雄二 (2009). 男子青年における瘦身願望についての研究 教育心理学研究, 57, 263-273.
和田さゆり (1996). 性格特性用語を用いたBig Five 尺度の作成 心理学研究, 67, 61-67.

【注】

¹ 使用された用語は文献によって異なるが, いずれも類似の概念を扱ったものと考えたため, 本稿では「対人不安」として扱った。